

〔懸賞論文〕

福音と文化

——文化のフェティシズムと福音宣教——

荒井隆志

1 はじめに

ローザンヌ宣教シリーズの中の『福音と文化』という小冊子では、「文化」について次のように定義している。「文化とは、信仰や、価値や、習慣や、またこれらの信仰や、価値や、習慣を表現する機構など、社会を一つに結び合わせ、一体感や尊厳性や安心感や連帯意識を与える一つの統合された体系であると言える」⁽¹⁾。この定義は一つの意味を持つているが、現代の文化状況を考える場合には、それほど適当ではないように思われる。文化というものは非常に広範囲のものである。したがってまた、古くからさまざまな定義が試みられてきた。クラックホーンは何百という文化の概念を整理して、次のような定義を導きだしている。

「文化は、シンボルによって獲得され、また伝達される行動の様式および行動のための様式から成る。それは、人間の諸集団の判然たる業績を形づくり、さまざまな人工物として具体化されているものを含む。文化の本質的な核心

は、伝統的な(すなわち、歴史に由来し、歴史的に選択されてきた)諸概念、とくにそれに附せられた諸価値から成っている⁽²⁾」。

福音と文化ということを考える場合には、創世記一章二八節の、いわゆる文化命令をぬきにしては論じられない。したがって現代の文化状況の中で福音宣教を考えるにあたって、まず第一にこのみことばを背景として右のクラックホーンの定義を考えてみようと思う。

クラックホーンの定義によれば、文化は、行動の様式、および行動のための様式である。この場合の行動は、文化内における人間の行動にほかならない。その人間の行動はシンボルによって獲得され伝達される。私たちは、このシンボルは、神のみことばによって啓示されている神の意志でなければならぬと考える。またクラックホーンの言う文化の本質的な核心を構成している諸概念は、福音によって啓示されている諸概念でなければならぬと考える。したがってクラックホーンのことばを借りて文化の定義をしておせば、次のように言うことが出来るであろう。

「文化は、神の啓示を通して獲得され伝達される人間の行動の様式である。それは、人間の諸集団の判然たる業績を形づくり、さまざまな人工物として具体化されているものを含む。そして文化の本質的な核心は、福音が内包している諸概念、とくにそれに附せられた諸価値から成っている」。

さてこのような文化概念を土台として、現代文化の一つの面を切断して取りだし、そのような文化状況の中で福音をいかに伝達するかということを考えてみたい。シンボルとしての神の意志が無視されるとき人間の行動は混乱したものになってしまう。いいかえれば、文化を神のみどころに反するものにしてしまうのである。またシンボルを獲得し伝達する人間の問題が考えられる。人間は罪の結果として、神のみどころを不完全にしか実現出来なくなっている。したがってシンボルの獲得は恣意的になり、伝達は神の栄光のためではなく、自己の保身と安逸と快樂追及が中心的なものになってしまう。また福音そのものが無視されるとき、文化の本質的な核心が失われ、諸価値は混乱したものととなり、文化全体が頹落するという現象が生じる。

2 社会的規範の喪失現象

読売新聞の一九八二年十月十一日号に「先進国社会の行方」という座談会があった。その中で小田晋氏(筑波大社会学系教授)が、現在、先進国と言われる国々に共通している社会病理現象というものがあると述べている。それは①犯罪、非行の増大、②薬物乱用の増加、③離婚率の増大と家庭の変化、④精神障害の増加と質の変化などという現象である。そしてこのような「先進国病」というものの原因について、小田氏は次のように説明している。「一般的に言えば、社会的、文化的枠組みが個人の行動におよぼす規制、規範力の喪失という社会のアノミー化⁽³⁾(社会的規範の崩壊した現象)である」。

このような社会的規範の崩壊現象というものは、科学技術の進歩などによる社会の近代化、複雑化、そこから起ってくる価値観の多様化、情報の多様化などによって起こるものである。この社会的規範というものは、その社会の文化形成にとって欠くことの出来ないものであり、またその文化の継承にとっても重要なものである。しかし現代のように価値観が多様化し、社会的規範がその規範力を失って来ると、人間の行動様式に大きく影響して来るものである。それは人間の罪の性質から来る自己中心性をその社会自体が容認するようになって、神の意志を行なうことによって文化を形成するという積極的な方向には、働かなくなるからである。社会に提供されているさまざまな情報や価値観の多様化によって、人間の欲望は際限なく広がって行く。人間の欲望というものは、自分に都合のいいように広

がって行くものであって、自分に都合のいいように情報を受け取り、価値観を新しく生みだし伝達して行く。したがってますます社会の規範力は失われて行く。

法政大学の社会学の教授である中野収氏は、現代の若者の生態を次のように述べている。「学生たちが、「アイデンティティ・クライシス」を意識——時には過剰に——し、生きがいを感じ、学生とは何かとみずから問い、教育は何かと教師に問いかけ、みずからを傷つけながらも自己解体と再生を模索したのは、十数年前（一九七〇年代）筆者）のことである。今、大半の学生が、こうした事柄についての思考をやめ、問題への接近を拒否している。……今、学生たちは、あてもなくさまよい歩くのに実によくできている現実の物理的・情緒的・心理的な都市空間を、ただひたすらさまよっているだけだ——ちょうど『なんとなく、クリスタル』の主人公のように。情報誌という名のこれまたよくできたガイドブックをもって都市空間を浮遊すれば、心理の軽やかな緊張と弛緩、ささやかな興奮と覚醒が容易に手に入る。しかも、全生活時間を投入してもつきあいきれない文化・娯楽的装置が空間に多様かつ大量に用意されている」⁽⁵⁾。

これは現代文化の中での人間の行動の様式であると言うことができる。中野氏はこのように現実を分析し、このような文化状況が青年たちの人格形成にどのような影響を与えているかを論じている。「こんなところに、たとえば人格の形成に不可欠といわれる欠如感が発生するわけがない。したがって、欠如の意味、欠如のゆえん、欠如を充填する方法、について思いをめぐらす必然性など、全然ない。自己確認Ⅱアイデンティティは、漂流に伴う神経と心理の脈動にあると思っていればいいのだ」⁽⁶⁾。欠如感がないということは、多様な情報が豊富に提供されているので、その選択権が、完全に受益者の好みにまかされているということの結果である。次から次へと新しい刺激が、向うからやって来て、受ける側ではそれを好みに応じて取捨選択するわけである。「なんとなくクリスタル」に描かれる主人

公の生き方は、まさにそういう選択の生き方にほかならない。そこには現実の問題を判断し、それに主体的に应答するという人格の働きの場がほとんどない。自分の主体的な判断と应答、そして主体的な決断という過程を経ないで、ただ単にコンピュータのように機械的に应答して行くだけのものとなってしまふ。

中野氏はこのような欠如感のないということは、人格形成上にゆがみを生ずるということを見抜いている。「少なくとも自我のある部分は、外的世界との緊張、抵抗感の中で生まれる、というのは学問的な常識である」⁽⁶⁾。人がその成長の過程でその人格を形成するのは、中野氏が述べるように外的世界との緊張、抵抗感の中でなされる。そしてこの外的世界が神の歴史支配の中にあるのだと考えるとき、正しい意味での人格形成は神との生きた交わりによってなされると理解して良い。すなわち神のみことばに应答するとき、神のみことばが私たちにとっての、社会的規範となり、みことばによって罪が、言い換えれば「欠如感」が刺激されて、正しく人格形成がなされるのである。神のみことばへの应答によって人間の行動様式が定まる。そこに神のみことばにかなう文化が形成されることになる。

3 罪の文化の虚無性

人間の罪は、文化の対象であるところの自然と、文化の作為者であるところの人間との関係に重大な変化を与えた⁽⁹⁾。罪というものは神への反逆であるが、罪の状態の中で人間は、自分の行為について、何が正しいか何が不正であるかを決定する規準を失っている。したがって自分の判断以外に規準がなくなっている。そこで自分の判断を絶対化するということが起こってくる。この自分の判断というものは、いつも神のみことばに一致するものではない。むしろいつも神のみことばに反するものであると言うほうがよい。

したがってそこでは、神のみこころ、すなわち神の支配のみわざに反することが起こってくる。神の支配と、人間の行ないとの間に調和がなくなってしまうのである。「人間が文化の対象として自然に向かう場合に、人間と自然との間に調和がなく、自然が自然らしい運動の中に、人間の力が否定され、また、人間が自然を媒介して作る文化建設に、虚無性があらわれた」⁽¹⁰⁾。

自然は神の支配のもとにあって、神が最初に創造した時の秩序の中で自然の運動をしている。罪の中にある人間がそれに逆らう行為をする場合には、結果は空しいことになる。

畑に種を蒔けば収穫があるというのは、自然がそのように働くからである。自然はそのように、種を蒔けば収穫があるように秩序づけられている。ところが人間がより多い収穫を上げようという意図のもとに、その畑の土壤に、その土壤が持っている能力以上のことを期待して種を蒔くと、反対に収穫がなくなってしまふという現象が起こる。これは自然の法則に逆らった結果である。またアジアやアフリカやアマゾンなどの熱帯地方で、大規模な森林破壊が進んでいると言われているが、その原因の一つには、その地方に住む人々の「焼き畑農業」があるとされている⁽¹¹⁾。これも同じように神の秩序に反する結果である。

また農業を多量に使用するような場合、農業は害虫や雑草を駆除すると同時に、その土壤の中に最初から仕組まれている自然の生体系をも破壊してしまうことになる。土壤の中に含まれている各種の微生物、バクテリアまでも、そういう農業は殺してしまう結果になる。そういう微生物は作物の成長に欠かせないものであるが、それがなくなってしまうえば、その当然の結果として、その土壤は死んだものになってしまう、作物は出来なくなる。これは自然法則である。自然法則が、人間の罪から来る神の支配に対する無知の結果、人間の力、努力が否定されてしまうことになる。すなわち虚無性が現われるのである(ローマ八・二〇、創世記三・一八)。したがってこの虚無性には、神との

関係における倫理的な意味が含まれているのである。またこれとは反対に、現実のさまざまなことが神の御手の保持の中にあることを認めなければならない。電気が発見され、それを造り出すことが出来るようになり、それをモーターで動力として使う。こういうことは原理的には決して変わらないものである。また竹や木や金属などの管に小さい穴を開けて、そこに勢いよく空気を吹き込むことによって笛という楽器が出来るということは、すでにカインの一族の時代から変わりのない原理である。そういうことがきわめて日常的に私たちの回りに存在しているが、そういうことを可能にしているのは、神の御手の保持のみわざなのである。このことを私たちは認めなければならない。

これらのことは最初にあげた文化の定義の中で説明した「人間の業績」また「人工物として具体化されているもの」である。そういったものが神の創造の秩序からそれで行くとき、必ずしも人間の福祉に役立つものとはならない。その結果として文化は頹落し死滅して行くのである。福音のメッセージには、このような文化の頹落現象に対する警告があり、その回復の指針が指し示されていると言ふことができる。

4 文化のフェティシズムとその中での人間

人間の罪による文化形成は、必然的に文化そのもののフェティシズムを生み出す。「フェティシズム」というのは「物神崇拜」と訳される。この意味は最も素朴には、物そのものに超自然的な力があるとしてそれを崇拜することで、未開人に見られる原初的な宗教形態のことである⁽¹²⁾。聖書ではこのような物神崇拜が非常に厳しく禁じられている⁽¹³⁾。アロンが造った金の子牛の像はまさにこの物神化を表わしている。そういう偶像によって、本物の神が見えなくなってしまう。またユダヤ人は、神のことばである律法を重視する結果、律法そのものを物神化してしまう⁽¹⁴⁾。その結果、律

法を守ることに非常に熱心であったが、その律法が指し示していたメシヤの来臨を、律法そのものの中に見出すことに失敗した。⁽¹⁵⁾

中央大学教授の丸山圭三郎氏は現代の文化状況を「文化のフェティシズム」としてとらえている。⁽¹⁶⁾丸山氏が現代の文化状況を「文化のフェティシズム」ととらえるのは、現代が「本物の喪失」の時代であり、「もどき文化」「複製文化」の時代であるということである。⁽¹⁷⁾現代の文化のあらゆる面でこのような現象が起こっている。このような現象は識者の間で、いろいろなかたちで分析されている。宇波彰氏は現代は「教養文化と大衆文化、——ハイアートとローアートの境界線がぼやけ、拡散している時代」であるとし、そのような時代は「スター、旗手、カリスマの不在は、共同体意識が薄れ神話が成立しにくい」時代であり、「必然的に文化はキッチュになる」⁽¹⁸⁾と述べている。⁽¹⁹⁾また中野収氏は同じような現象を「コピー体験の文化」としてとらえ、⁽²⁰⁾桜井哲夫氏は、全てのものが商品化されへモノ化し、ことばによるコミュニケーションが不信感に陥っている現実としてとらえている。⁽²¹⁾

このようにさまざまな概念でとらえられる文化現象は、この世のほんとうのものが見失われて、虚無化した文化の表面だけが新たにひとつの価値としての意味を持つようになったからではないか。聖書から私たちが理解するのは、神の支配という絶対的なものが、この世の現実を支え、意味あるものとしているということである。しかしその土台が見失われ、文化の表層だけが意味あるものとしてとらえられているのが右のような現実となっている。したがってそれを一言で「文化のフェティシズム」と言うのは、ふさわしいであろう。

このような文化のフェティシズムという現象の原因として、これらの識者たちは一様に次のようなことを指摘している。

- 1、大衆文化の急速な膨張、あるいは文化の大衆化現象
- 2、それを支える情報産業の巨大化
- 3、コンピュータを中心とする技術革新
- 4、全体的な管理化された社会

次にこのような文化状況の中で、人々はどのように行動し、どのようなコミュニケーションをしているかを見ておきたい。

右にあげた文献の中では、それぞれに同じように、現代の文化現象の中に二つの相反した大衆社会現象があると述べている。一つは人々の孤立化、自閉化の現象であり、もうひとつはそれとは全く反対に画一化、あるいはきわめて表面的な連帯である。

(一) 孤立化というのは、今の社会の「装置」がそれを促進するように配置されているので、必然的に起こって来るものである。現代の青年たちが人格形成の最も重要な時期である高校生、大学生の時代に、彼らが外界（すなわち社社）との接点としてとびつくあらゆる「装置」は、ラジカセを出発点として、ウォークマン、⁽²²⁾さらにオーディオ装置、オーディオ・ヴィジュアル装置、そしてファミリー・コンピュータやパーソナル・コンピュータ、オートバイ、車といったものである。彼らはこれらのものを自分のまわりに、好みに応じて並べておき、それらにまるで城壁のように取り囲まれた中で、自己形成をする。⁽²³⁾彼らは、そういう装置を介して他者と交わるので、そこには人格的な交わりはなくなってしまう。いわばこれらの装置が神格化されていて、彼らはそれに献身しているのである。したがって、他者との直接的な人格的交わりの中には行って行くことがない。まして自ら積極的に他者との交わりを造りだそうということもない。そのようなところでは人格の孤立化が進むだけである。⁽²⁴⁾

(二) 画一化、あるいは表面的な連帯は、丸山氏によれば「個性喪失、不和雷同型」であり、「みずからを共同化し

ないと自己のアイデンティティが失われるという不安から、いつも人がするのと同じことをしないと安心できない」ということである。⁽²⁵⁾このような連帯は、人格どうしのぶつかり合いの中から生まれる連帯ではなく、画一化された文化の表層を共有するという形での連帯である。⁽²⁶⁾人格的な交わりでの連帯を造ることがないので、同じファッションを着るとか、単調なリズム先行型の没个性的音楽を共有するとか、同じ情報を共有するということで、かろうじて保たれている連帯である。孤立化した人格は、自分を封じ込めたカプセルで、他者との連帯を造り出す。そのカプセルそのものは、これまた画一化された「装置」であるので、その他者との関係には個々の人格の個性が表現されることは全くなくなっている。桜井氏は、このへんのことを、あいまいになっている「境界」が、さらに崩壊した状態と言っている。そしてその「境界」が崩壊した後は、全てのもがへモノ化した現実だけが残っていると述べている。⁽²⁷⁾

以上見てきたことは、文化の虚無化の中で人間関係の虚無性であると言える。聖書は終末になるとせ預言者が多く起こって多くの人々を惑わし、その結果不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷えると言っている(マタイ二四・一一―一二)。このところの「不法」と訳された語は、*anomia*で、このギリシャ語は、始めのところでは考察した「社会のアノミー化」の「アノミー」ということばの語源である。したがってこのマタイの福音書の警告は、終末にはこの社会の「アノミー化」が社会全体に行き渡るので、「愛」すなわち人間関係の最も基本となるものが崩れていくということである。愛は人格と人格との交わりなのである。

このような現象は、今の私たちの社会ではきわめて一般化している現象であるが、私たちが注意しなければならぬことは、このような現象が教会の中でのキリスト者どうしの交わりの中にも入りこんで来ることである。物神化されたさまざまなへモノに心を奪われてしまって、まことの神との生きた交わりを失わないように、注意しなければならない。聖書のメッセージが、私たちにあって、非常に重要な社会的規範の意味を持っていることを、私たちは自覚しなければならぬ。したがって聖書に対する信頼を、私たちはより深めて行かなければならないのではないか。

5 日常世界のリアリティ

大阪大学助教授である山口節郎氏は「社会と意味」の第二章「狂気と物象化」の中で、人間というものは社会、すなわち「自己以外の世界に向かって意識的に自己を投企」して行くものであると述べている。⁽²⁸⁾それによって自己の存在を認識し、自己を意味あるものとして造りあげていくものである。ここではこの山口氏の理論の線にそって神のことはへの応答のありかたを考えてみたい。山口氏はこの自己が自己を投企して行く対象を、モノ、他者、自己という三つの関係としてとらえ、それぞれの関係で自己疎外を生じることを説明している。私たちはこの三つの関係に加えて、自己対神という関係を認めなければならないのではないか。この自己対神という関係が正しく成立しているときに、私たちは上の三つの関係も正しく保つことが出来るのである。すなわち山口氏が言うような自己疎外を克服し、神の文化命令を実現することができるのである。それが無い場合には、上の三つの関係は虚無化してしまうのである。

私たちの世界が虚無化した世界、あるいは「頹落した世界」(山口氏)であるために、上の三つの関係での自己投企が、いつも虚無的な方向に向かうことになり、人々を孤立化させ、あるいは画一化させるのである。⁽²⁹⁾神の支配、保持の御手は、この三つの関係そのものの中に働いている。言い換えれば、この自己対モノ、自己対他者、自己對自己という関係は、神の創造の秩序の中に含まれていたものである。また、このような神の支配と保持のみわざは、歴史を形成して行く。したがって自己対神という関係は、神の歴史支配への自己投企であり参与であると言いうことが出来

る。クラックホーンが言うように、この自己投企によって「歴史に由来し、歴史的に選択されてきた伝統的な諸概念」が形成され、それが文化の本質的な核心を構成すると言うことができる。

このような神の歴史支配への参与ということは、言い換えれば、神のみこころを求める行為であり、神の歴史支配とのかかわりを求めるので、その中で意味のある行動様式となっていく。どんなに現実の世界が虚無化しても、その中で自分の行動様式に何の「意味」も見出せないような世界は、人間社会では成立しない。人々は必ずそこに何等かの「意味」を見出さなければ、生きることは出来ないし、それこそ狂気に陥ってしまう³⁰⁾。したがって神の歴史支配とのかかわりを求めない行為というのは、その行為の「意味」を失って、別の行動様式を生みだし意味づけをせざるをえなくなる。こうして新たに「意味」づけられた世界がそこに出現することになる³¹⁾。

このようにして出現した新たな「意味の世界」は、いわば神という絶対的なものとの関係を排除したところに成立している。それによってこの世界の絶対的なものが相対化されるということが起きているのである。しかもその相対化された新たな意味の世界は、そこで再び絶対化されるのである。しかしこの絶対化は、唯一神というような絶対化ではなく、多様化した意味のそれぞれにおける絶対化である。こうして絶対化されたものは、そのまま神格化され、人々にとっては神々のような位置を占めることになる。まさに虚構の世界が出現することになる。こうしてヘモノ³²⁾が神とされ、フェティシズムという現象が、この世の文化状況の中に行き渡るのである。

この新たに出現した「意味の世界」の客観性をどこに求めるのかということが、現代の社会学のひとつの課題である。A・シュッツ³³⁾はこの意味の世界を「日常的世界」とする。そこに人間社会のリアリティを見出そうとしている。今までに見て来たように、この日常世界という現実、価値観の多様化している現実である。桜井氏が言うように、それはむしろ価値観の多様化というより、意味の細分化であると言っほうがよいかも³⁴⁾。したがってそこで

は、人間どうしのほんとうの意味での交わりが不可能になるという現実が起こる。江原由美子氏はこのような文化状況を分析して、それは「リアリティの多元化」であると言っている。そしてそのような文化状況の中では、デイス・コミュニケーション³⁵⁾が起ると述べている。これは別の言いかたをすれば、社会的規範の喪失、すなわち「アノミー現象」ということである。このような意味の多元化、あるいはリアリティの多元化という現象は、これからもますます進むものと思われる。そのような現実の中で私たちは、キリストの福音を宣教しなければならぬわけであるが、そのための土台、あるいは客観性というものをどこに置くかということ、重要であるように思う。そこで次には、このような文化現象の分析を手がかりとして私たちが主張しうる「リアリティ」の問題について考える。

6 歴史のリアリティについて

右に見た「日常世界のリアリティ」に対して、私たちは「歴史のリアリティ」というものを主張しなければならぬのではないかと思う。そこでここでは、「歴史のリアリティ」ということについて考え、それによって私たちがいかにして現代の文化状況の中でキリストの福音を主張することができるかを考えたいと思う。

山中良知師は、その『宗教と社会倫理』³⁶⁾という著書の中で、神のみこころを「第一原因」と呼び人間の意志による自由の行為を「第二原因」と呼んでいる。そして第二原因の中にある悪は、第一原因によって結局は淘汰されて行くものであると述べている。聖書は確かに第一原因の实在性というものを前提として、人間の日常性を述べており、解釈し、説明している。しかし今日の一般的な思想状況の中で、この第一原因の实在性を納得させて行くことは非常にむずかしい。ここではこの第一原因を「歴史のリアリティ」ということばをもって表現しようと思う。

まず「歴史のリアリティ」ということばに若干の説明を加えておかなければならない。ここで「歴史の」と言う場合は、言うまでもなく山中良知師の言う歴史の第一原因のことであり、神の歴史支配のことである。そして「リアリティ」ということばを使うのは、「実在性」とか「真実性」ということを表わそうとしているからである。そして私の理解するところによれば、神の歴史支配にこそ真の実在性があり、真の意味での真実性がそこにあるからである。今日の思想状況の中では、このような歴史のリアリティというものを信用しなくなっている。そういうことを考えることは、全く無意味であるというような風潮にある。しかし私の理解によれば、この歴史のリアリティを認めなければ、歴史的現実の客観性の保証が得られなくなってしまうのではないかと思える。ルネッサンス以後にめざましい発展を遂げた、近代科学的な思考方法によって、科学的な手段によって調べられるもの、あるいは実証出来るもの以外は、信じないという思想が築かれてきた。このような近代科学の方法論によって、聖書そのものも疑われて来た。

歴史のリアリティの実在性を説明するのに、まず聖書の記事そのものの中から、聖書の記事がどのように歴史のリアリティの上に築かれているかということ、簡単に見ておきたい。

第一に山中良知師が前記の第一原因、第二原因の説明の所でもその例として上げていることであるが、ヨセフの物語を見ておきたい。このヨセフ物語は歴史のリアリティというものを実に見事に記している。食料を買いにきた兄たちに対してヨセフは、自分であることをあかしして、このようなことが起こったのは、全て神の導きによるものであると言う(創世記四五・五〜八)。それは人間の眼には不運であり、悪と見えるような歴史の展開にも、神の支配の御手があったということである。すなわちここでヨセフは、はっきりと歴史のリアリティを認めて、自分の日常性(山中師のことばで言えば「第一原因」)を解釈しているのである。また最初のキリスト教会を形造った使徒たちは、キリストの復活という事実を人々に語った(使徒二・二二〜二四、三二)。また彼らはイエスの御名によっていやしがなされたという事実を主張した(使徒四・二〇)。彼らもまた、歴史のリアリティを認めて彼らの日常的な出来事を語っている。これらのことはいわば「出来事のリアリティ」と言うことが出来る。

第二に使徒パウロのことについて考えよう。パウロが復活のイエスに突然に出会う記事が、使徒の働きの中に三回記されている。一回はルカの手になる歴史的記述として(九・一〜九)。あとの二回はパウロ自身の口から語られたあかしとして記録されている(二二・三〜一六、二六・九〜一八)。これらの記事から知られることは、パウロが復活のイエスに出会ってからは、歴史のリアリティというものがはっきりと見えてくるということである。それゆえにそれ以後のパウロは、この歴史のリアリティにしっかりと眼を注いで、言い換えればそれにしっかりと根づいて、その生涯を歩み続けたと言える。彼はそういうことを、もうひとつ別の表現をもって表わしている。それはキリストを信じる信仰による歩みということである(ガラテヤ二・二〇)。このようなパウロの理解は、「復活体験と信仰のリアリティ」であると言うことが出来る。

第三は預言者たちの証言である。アモスという預言者は、イスラエルの支配者層の人たちがぜいたくな暮らしをして、民の貧困を放置していることを鋭く追求している。ダマスコの長いすや、冬の家、夏の家、象牙の家といったよくなぜいたく品は、やがては滅ぼされると主張した(アモス三・一二、一五)。彼は人々がそういう日常性の中に埋没してしまって、神が全ての人に平等に分け与えようとしておられるこの世の富を、独占していることに気がつかないという点を指摘している。彼はそういう日常性の中に、歴史のリアリティをはっきりと見つけ、そこから日常性を考えているのである。預言者たちの発言は、そういう意味でどれも同じである。そして預言者たちは、自分がそういう日常性を分析して語っているというよりも、神から直接示されたことばを語っているのである。そういう意味で彼らの場合には、「神のことばのリアリティ」であると言うことが出来る。

これらの三つのこと、すなわち「出来事のリアリティ」「復活体験と信仰のリアリティ」「神のことばのリアリティ」によって、私たちは、私たちの日常性というものを解釈しなければならないのである。言い換えれば、このことは、神の歴史支配のみわざを承認することを意味する。聖書によれば、この世界の歴史は、神の天地創造の時から、イスラエルの召し出しと契約、救い主の誕生と十字架、そしてキリスト教会の誕生から、再臨を経て新天地へと進んでいる。この神の歴史の全体的支配の中で、私たちの日常生活というものは存在している。したがって私たちの生活がこの歴史のリアリティに、しっかりと根づいていなければならない。そこから遊離すると、日常性のリアリティの基礎を失ってしまうことになる。

C・ヘンリーはその『キリスト者の社会的責任』⁽³⁷⁾の中で、今日の社会において、キリスト教会がどのような伝道の神学を持つべきかについて次のことを述べている。すなわち、初代教会における重要な神学を次の五つの点から考察しながら、今日においてもこれらの神学に基づいて、キリスト者の生活は築かれなければならないし、また宣教そのものも、これらの神学に基づいて為されなければならないと述べている。これらは言うまでもなく、歴史のリアリティに基づいているのである。

(一) イエス・キリストのからだの復活。この「からだの復活」のメッセージこそ、「この世界における伝道的運動としての教会の存在を説明してくれる、唯一の説得力ある説明である」⁽³⁸⁾。

(二) 復活のイエスの實在性の経験⁽³⁹⁾。これはペンテコステのときの聖霊が与えられるという経験によって、確実なものとなった。「ペンテコステの日、復活したイエスは約束された聖霊の賜物において彼らに出会われ、彼らを新しい男と新しい女へと造り変え、まさに新しい交わりを創造された」。このイエスの復活のリアリティと聖霊によって全く新しくされるといふ経験は、彼らをこの罪の社会の中にも、神の民としての新しい生き方を実践させることになった。

(三) この世のものとは全く異なった理想の意識を持っていた。「これら初代のキリスト者たちが知っていた至福の頂点は、キリストの再臨、彼の義の宣告、そして終わりの日の悪の審判にはかならなかった。この世のいかなるユートピアの夢も、彼らがイエス・キリストに対して持っていた人格的関係の中心的な重要性を曇らせることはできなかった」⁽⁴⁰⁾。この確信のゆえに、初代教会のキリスト者たちは、この罪の社会の中に、キリストの再臨、キリストの義の宣告、悪の審判などを、大胆に宣べ伝えて行った。彼らはこの確信をもって生きることによって、自分たちがこの世の者ではなく、神の国の者であることを自覚し、またあかしたのである。

(四) 「初代のキリスト者たちは、また、この世において働くように職務を与えられた」。彼らには「この墮落した世界を見捨てる代りに、彼らはそれに向かって、救いとすばらしいおとずれとをもちあらす使命があった」⁽⁴¹⁾。彼らはそのような使命によって、この罪の社会の中に生きる意義を発見していたのである。彼らの、自分はこの世の者ではなく、神の国の者であるという意識は、いわば二重国籍のようなものであった。ここに初代のキリスト者たちの、自己理解と社会についての意識を見ることが出来る。彼らはいわば、神のものとして、神の御霊によって生かされ、そして神の福音をこの世に伝達するために、この世に生かされているのである。「贖われた者たちの新しい家族社会である教会は、自らを新天地の小宇宙あるいは縮図として、それを反映するように求められている。教会は、人類共同体の全体に向かって神のご計画の全貌を宣言し、彼の戒めに全世界が献身するように説得すべく召されている。……社会倫理とは、教会がこの世界に強要するある種の官僚的賦課物ではなく、生ける神に仕えることの喜びと恩恵とをこの世界に映し出すことである」⁽⁴²⁾。

(五) 今日のこのような文化状況の中で、また今日のような科学技術の時代の中では、初代教会のキリスト者たち

は、どのように生きたらうか。この間に對する答えは、彼らはこの時代の中にあっても、福音の真理に生きることを揺るがせにすることはなかつたであろうということである。彼らにとっては「この現代社会の何物も、福音のために最も大胆にイニシアチブをとることから彼らを躊躇させはしないであろう。……すなわち、神はお語りになった。キリストは死んでよみがえられた。罪のうちに滅びるしかない人間は、今日でもなお、まさに時間と永遠の両世界にふさわしい、そして神によって人類に用意された生命を持つことができるのだ、という福音をもって」彼らは生きることである⁽⁴⁴⁾。

7 結 語

結論として、今日の私たちの場合にも、上に述べられた五つの基本的なキリスト者のありかた、①キリストの復活の確信、②復活のリアリティと聖霊による歩みかた、③再臨への希望、④キリスト者としてのこの世での使命、そして⑤福音の真理に生きること、これらによって生きるということについては、全く変わりはない。これらが福音的キリスト者のしるしなのである。そしてそれはまた、神の民のしるしであり、さらに神によって造られている全人類が受け入れられるべき真理なのである。すなわちそれが文化の本質的核心でなければならぬ。これによって人間の行動様式が定められるとき、そこに神のみこころにかなう文化が成立する。人間の墮落の結果、滅びへと向かっている文化は、必然的に物象化され、積極的な意味を失っていく。しかし福音のメッセージは、そのような文化状況の中にあってもなお、人々の目を真理へと向けさせ、生きるための積極的な意味を与え、虚無化する現実を克服する力を人々に与えるものである。

注

- (1) ローザンヌ委員会編『福音と文化』(中島守訳、ローザンヌ宣教シリーズNo.2、関西ミッション・リサーチ・センター/日本福音同盟)七頁。
- (2) 生松敬三「文化」の概念の哲学史」岩波講座、哲学」13(岩波書店、一九七二年)一〇〇頁。
- (3) 「アノミー(anomie)はもともと「無法律状態」などを意味するギリシャ語であったが、デュルケムによって社会学上の概念として復活された。……デュルケムは、これを集団間の規制の弛緩ないし崩壊や、人々の欲望の脱規制化をさすものとして用いている。……(後者では)社会の急激な変動が人々の社会的地位の変化をうながし、それと同時に社会的規範の弛緩や欠如をまねく結果として、人々の欲望に節度をあたえる社会的規範がなくなり、焦燥や欲求不満が激しく昂じるといふ現象が、アノミーとよばれた」(塩原勉ほか編『社会学の基礎知識』有斐閣、一九八二年、三一頁)。
- (4) 田中康夫の「文芸賞」(一九八一年)を受けた小説。これによって「クリスタル世代」が登場したと言われ、ブームを生んだ。
- (5) 中野 収「ナルシスの現在」(時事通信社、一九八四年)、五五頁。
- (6) 前掲書、同頁。
- (7) このような新しい刺激を提供する側では、つねに激しい競争をしながら、それを受ける側の満足を満たし続けるということがなされなければならない。その結果、週刊誌の見出しはときつくなり、写真はますます刺激的になる。
- (8) 中野 収「ナルシスの現在」五六頁。
- (9) 山中良知「宗教と社会倫理」(創文社、一九六〇年)三九頁。
- (10) 前掲書、同頁。
- (11) 『世界』臨時増刊号「世界を読むキーワード」(岩波書店、一九八六年)一一頁。
- (12) 粟田賢三、古在由重編『岩波哲学小辞典』(岩波書店、一九七九年)二〇一頁。丸山圭三郎氏は「フェティシズムと快楽」(紀伊国屋書店、一九八六年)の「キーワード解説」(一六六頁)でフェティシズムについての独特の理解を述べている。
- (13) 直接的には、「自分のために偶像を造ってはならない」(出エジプト二〇・四)がそれであるが、聖書は全体的にあらゆるものが偶像になりやすいことを暗示している。唯一のまことの神以外のものが、礼拝または崇拜の対象となる場合に、それは必ず神の力をもち、人間を支配することになる。それが物神化である。

- (14) 「神は『あなたがたの父と母を敬え』また『父や母をのしる者は、死刑に処せられる』と言われたのです。それなのに、あなたたちは、『だれでも、父や母に向かって、私からあなたのために差し上げる物は、供え物になりましたと言っ者は、その物をもって父や母を尊んではならぬ』と言っています。こうしてあなたがたは、自分たちの言い伝えのために、神のことは無にしてしまいました」(マタイ一五・四一六)。これなどは言い伝えそのものを物神化していることであると云える。物神化された言い伝えによって、まことの神のことが見えなくなっている。この現象は、罪ある者が、自らの罪を認めたくないがために、便法を考え、それが絶対化されていくという現象である。パウロがその宣教の生涯の初期に直面した律法主義、言い換えれば割礼の問題との対決は、これと同じように真理を別ものにおきかえて、それを絶対化しようとする誤りとの対決である。
- (15) マルクスは資本主義社会のフェティシズムを見抜いて次のように分析した。「商品生産社会では生産手段の私有により生産が無政府的に行なわれるから、商品生産者どうしの社会関係は商品の交換を通じて現われるよりほかない。従って人と人との関係が物と物との関係として現われ、人間の社会関係がおおいかくされる。そして生産物の商品としての性質(例えば価値)は、それが社会関係の表現であることがかくされて、いわば社会的な自然的性質として現われる。マルクスはこれを商品の物神性とよび、商品生産社会では商品、とくに貨幣が人間に支配力をもつことを物神崇拜とよんだ」(粟田賢三・古在由重編『岩波哲学小辞典』同頁)。
- (16) 丸山圭三郎『文化のフェティシズム』(勁草書房、一九八五年)。
- (17) 前掲書、二九頁。
- (18) アブラハム・A・モル『キツチュの心理学』(法政大学出版社、一九八七年)、一頁。「キツチュ」というのはドイツ語で、「一定の様式にこだわらない様式がキツチュであり、機能的には十分に充足しているところに付け加えられた心地良さの機能がキツチュであり、さらには「余り多すぎない」進歩がキツチュだということになったのである。しかし、この概念の中核をなしているのは、現在でもなお、その語が使われはじめたころの価値評価的意味あいであり、ニュアンスなのだ。すなわち、キツチュとは粗悪品のことなのである」。
- (19) 宇波 彰「収縮、膨張そして拡散の時代へ——若者文化の系譜」『朝日ジャーナル』(一九八三年九月二五号)一〇六頁以下。
- (20) 中野 収『コピー体験の文化』(時事通信社、一九七九年)。
- (21) 桜井哲夫「ことばを失った若者たち」(講談社現代新書、一九八五年)。
- (22) 中野 収『コピー体験の文化』五八頁。中野 収「まるで異星人」(有斐閣、一九八五年)八頁。
- (23) 中野 収氏は、このような志向を持つ者を「カプセル人間」と名づけた。『コピー体験の文化』八一頁以下。
- (24) 桜井哲夫氏は、一九六〇年代から七〇年代に起こった学生叛乱が挫折に終わったあとで、日本中に「対立」を回避し、「他人に迷惑をかけない」風潮を生み出したと述べている。そしてこのような現実を次のように評価している。「対立」を生まないコミュニケーションの世界に、人びとの信すべき価値が生み出されるはずもない。おそらく、日本語のコミュニケーション様式はかつてないほど奇妙なものとなった。どのような言語といえども、たとえあいまいな意味関連の日本語でさえ、「対立」こそがひとつの価値の意味を生み出すはずである。にもかかわらず、運動の敗北の後の虚脱感のなかで、「言葉」への不信をときずまわしていった若者たちだけではなく、日本の社会全体のなかに「対立」を排除しようとする傾向が一般化していった」(桜井哲夫「ことばを失った若者たち」二二二頁)。このことが反対に孤立化を促進した。
- (25) 丸山圭三郎『文化のフェティシズム』二〇頁。
- (26) この連帯はサルトルが「存在と無」のなかで分析した「對他意識の欠如」の上で成立しているもので、「つまり、神話的なスターになるのでもなく、また関心の持ちかたが徹底的にのめりこむというようなものではない。とことなく相手を対象化して、サルトルの哲学の盛んなころに使われた「アンガジェ」(参加)というような態度がない」(宇波 彰 同頁)。
- (27) 桜井哲夫「ことばを失った若者たち」一五一頁以下。
- (28) 山口節郎『社会と意味』(勁草書房、一九八二年)四九頁以下。
- (29) 類落した世界の中で、「疎外された存在を生きるさなかにあってさえ、人はやはり世界と自己自身を實現化する。しかも世界の内容をますます貧困化し、自己自身をますます喪失するような形で、それらを実現する。ここでは弁証法は失われるのではなく、逆機能的に作用するのである」(前掲書、五二頁)。
- (30) V・E・フランク『神経症』Ⅱ(みすず書房、一九七六年)七頁以下。
- (31) そこではもはや共通の意味が失われてしまつ。「あまりにも拘束事が細分化されて、共通の「意味」が成立しにくいからこそ、キーワードや用語解説の書物や雑誌が氾濫することになるのだ」(桜井哲夫「ことばを失った若者たち」一八四頁)。
- (32) Alfred Schütz (1899-1959) は、「フッサール現象学」の、とくに「生活世界」の概念に、自己の社会学的基礎を求めようとした。……フッサールの「生活世界」の概念は、日常生活の領域こそが、一切の理念的客観的な諸学問の存在根拠であることを示

す。シュッツの社会学はこれを受けて、人間が日常的な現実として持っている常識的世界（いわゆる社会）というものを、どのように主観の中で構成してゆくのかという点に、主要なテーマを置いた」（竹田青嗣）『現象学から実存主義へ』に関する中心人物の解説』『現代思想入門』別冊宝島、TCC出版局、一九八五年、七九頁。

(33) 山岸 健「日常世界と人間」。江原由美子・山岸 健編『現象学的社会学』（三和書房、一九八五年）、一八頁。「シュッツが見るところでは、私たちの日常世界ははじめから文化的な相互主観的世界なのだ。こうした世界が相互主観的である理由は、私たちが多くの人びとのなかの人びととしてその世界で生活しており、共通の影響と活動をつうじてそうした人びとに結びついており、他者たちを理解したり、また、他者たちにとって私たちが理解の対象であったりするからだ」。シュッツはこのような日常世界を「至高の現実」（パラマウント・リアリティ）と呼んでいる（一九九頁）。

(34) 桜井哲夫「ことを失った若者たち」一八三頁。

(35) 江原由美子『生活世界の社会学』（勁草書房、一九八五年）一一頁以下。

(36) 山中良知『宗教と社会倫理』六六頁。

(37) C・ヘンリー、J・キリスト者の社会的責任』（いのちのことば社、一九八〇年）七一頁以下。

(38) 前掲書、七三頁。

(39) 前掲書、七六頁。

(40) 前掲書、七七頁。

(41) 前掲書、八一頁。

(42) 前掲書、八六頁。

(43) 前掲書、八九頁。

(44) 前掲書、九六頁。

（八王子キリスト福音教会牧師）